

## 出エジプト記4章「人々の前での働き」

### 1A 召しを拒むモーセ 1-17

1B 主のしるし 1-9

2B 口の重さ 10-17

1C 主の能力 10-12

2C アロンの代替 13-17

### 2A 召しに応えるモーセ 18-31

1B ミディアンからの出発 18-26

1C イテロからの許可 18-23

2C ツィツポラの怒り 24-26

2B イスラエルの応答 27-31

## 本文

出エジプト記4章を開いてください。私たちはモーセが主に召され、イスラエルの人々を救う働きに関わる部分を読んでいます。前回の3章で、モーセがホレブ山において、燃えているのに燃え尽きない柴を見て、そこから主なる神が語りかけられたところを読みました。そして、主がモーセにエジプトに行きなさいと命じられて、それでモーセが行けば 3 章と 4 章の前半はなかったのですが、モーセが、「私は、いったい何者なのでしょう。(3:11)」というところから始まり、モーセがその召しにそのまま応答するのを躊躇していました。そこで主は、「わたしがともにいる」と約束してくださいました。次にモーセは、「民は、その神の名は何か？と尋ねるでしょう。」と言ったので、「わたしはある、というものである。」と答えられました。それから、ご自分がモーセにしてほしいことを、そのご計画を話し、指示を与えられます。

### 1A 召しを拒むモーセ 1-17

ところがモーセは、またもや質問をします。4章から明らかになってくるのは、「自分が人々からどう思われているのか」という悩みです。世というのは、基本的に「調子を合わせる」ということで成り立っています。型にはまることによって、生き抜いていきます。けれども、主に召されて、主の御心を行なうということは、調子をむしろ合わせず、主の御心をわきまえ知って、それを行っていくことです。「この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのか見分けるようになります。(ローマ 12:2)」

### 1B 主のしるし 1-9

1 モーセは答えた。「ですが、彼らは私の言うことを信じず、私の声に耳を傾けないでしょう。むし

ろ、『【主】はあなたに現れなかった』と言うでしょう。』

彼が恐れていたのは二つありました。一つは、人々が、自分の言っていることを信じないのでは？という恐れです。耳を傾けないのではないか？という恐れです。モーセのように預言者として召されている訳ではないけれども、私たちがキリスト者として召されているならば、キリストについて弁明するように召されています。自分がキリスト者であることを言い表すこと自体が、難しいと感じる人々も多いです。その根っこには、「言ったことが、受け入れられるのか？」という心配です。そして、拒まれたらどうしようという恐れです。これは、誰もが抱く恐れでしょう。パウロがコリントにいた時に、激しい反対に遭いました。その時、主が共におられて、「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけません。(使徒 18:9)」と言われました。

もう一つは、「【主】はあなたに現れなかった」と言われることへの恐れです。自分がどんなに、自分がキリスト者になったと言っても、それはあなたの思い込みだろう。主イエスがおられると言っても、そんな現れているようには見えないけれどもな、と言われてしまうことであります。

2 【主】は彼に言われた。「あなたが手に持っているものは何か。」彼は答えた。「杖です。」3 すると言われた。「それを地に投げよ。」彼はそれを地に投げた。すると、それは蛇になった。モーセはそれから身を引いた。4 【主】はモーセに言われた。「手を伸ばして、その尾をつかめ。」彼が手を伸ばしてそれを握ると、それは手の中で杖になった。

主がご自分の力を表すことによって、現れてくださったことを示してください。聖霊の力によって、私たちも周りの人々が、「確かにこの人にはイエスがいる」という疑いもない証拠を残してください。そして、羊飼いの杖を使って奇跡を行なわれ、確かにモーセにご自身が現れたことの印を与えられていますね。彼が四十年間、いつも杖を手にして羊を飼っていました。そのあまりにも身近なところにあるものを神は用いられて、これをもって数々の不思議な奇蹟を行われていきます。神に大いに用いられている人はみな、普通の人です。自分が普段から手にしているもの、自分に備えられているものを神に捧げることによって、大きなことを行っています。

さらに、神の働きは他の奇跡と言われているもの以上の印であり、それらを超越したものであり、独特です。杖を蛇に変えるところまでは、巷の魔術師も行なっていました。けれども、それだけではないのです、杖を蛇に戻すということです。悪霊どもは破壊行為はできるかもしれませんが、破壊されたものを元に戻すこと、悪いものをよくなるという創造的な、命の働きはできないのです。そして、「手を伸ばして、その尾をつかめ。」と主は言われます。蛇を掴むのは頭からですから、これは常識と外れたことをやらせています。つまり、信仰を持っていなければ尾を掴めませんでした。主はモーセに訓練を施しておられました。

5 「これは、彼らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】があなたに現れたことを、彼らが信じるためである。」

ここが大事です、主は、ご自分の働きをご自分のしもべの不安によって妨げられるものではありません。主がやるとお決めになっていることがあって、それをやり続けていかれます。

6 【主】はまた、彼に言われた。「手を懐に入れよ。」彼は手を懐に入れた。そして出した。なんと、彼の手はツアラアトに冒され、雪のようになっていた。7 また主は言われた。「あなたの手をもう一度懐に入れよ。」そこで彼はもう一度、手を懐に入れた。そして懐から出した。なんと、それは再び自分の肉のようになっていた。

ツアラアト、らい病による印です。らい病と言っても、聖書では、いろいろな重い皮膚病を指していますが、これはレビ記において汚れたものとされて、宿営から出て行かなければいけないものとされています。後に、姉のミリアムがモーセを非難したために、らい病に罹ってしまいます。けれども、らい病に罹ること自体が印ではありません。もう一度、懐に入れたら元通りになるというところに、主が現れてくださった印があるのです。癒しや命、復活の業は主に属するものです。

8 「たとえ彼らがあなたを信じず、また初めのしるしの声に聞き従わなくても、後のしるしは信じるであろう。9 もしも彼らがこの二つのしるしを両方とも信じず、あなたの声に聞き従わないなら、ナイル川の水を汲んで、乾いた地面に注ぎなさい。あなたがナイル川から汲んだその水は、乾いた地面の上で血となる。」

主が、杖と蛇、らい病の手の印だけ与えたら民は信じるだろうと言われていますが、それでも信じなかった場合も用意してくださっています。後に第一の災いとして、神が行なわれるのと似たこと、ナイル川の水を血に変えることを行なわれます。主が、エジプトに対して行なわれることを予告のようにお見せになります。こうやって、主は確かにモーセに共におられることの確証を与えてくださっています。

## 2B 口の重さ 10-17

### 1C 主の能力 10-12

10 モーセは【主】に言った。「ああ、わが主よ、私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」

モーセの四つ目の言い訳であります。モーセは、自分は弁の立つような人ではないと言っています。確実に、自信を喪失している様子がうかがえます。けれども、彼はエジプトにおいて、高等教育を受けていた人です。「使 7:22 モーセは、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも

行いにも力がありません。」とステパノが言っています。ファラオの前で話す時には、しかるべき話し方の作法があったそうです。そういうこともわきまえていたことでしょう。けれども、彼は宮廷にいる時に、全く失敗してしまい、自分には全くできないのだという根本的な自信喪失を味わっています。人の感情というものは事実さえも曲げますから、彼は、「私はことばの人ではありません。以前からそうでした」と嘘を付いてしまっています。

私たちもこの世に生きていて、そうした自信喪失を味わっているのではないのでしょうか？キリスト者として生きるのは、到底、自分はその要求されていることはできない、という、打ちのめされたような思いになることがないのでしょうか？そうすれば、自分が主に仕えていることも虚しくなるし、これまで通りの生き方に戻りたいとまで願ってしまいます。そこで次の主の言葉が必要です。

11 【主】は彼に言われた。「人に口をつけたのはだれか。だれが口をきけなくし、耳をふさぎ、目を開け、また閉ざすのか。それは、わたし、【主】ではないか。12 今、行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたが語るべきことを教える。」

主が全てのことを行なわれます。これを、「主権」と呼びます。口を開ける事がおできになるだけでなく、口を閉ざすこともおできになります。私たちはどこかで、自分ができるかできないかによって、神のなされることも変わるというように、主の働きが自分に掛かっているかのように錯覚します。主が全てのことを行なわれます。主がなされようとしているのならば、聖霊の賜物によって一人一人に、それを行う力を与えてくださいます。それを信じて、一つ一つの事に当たらないといけません。それから、否定的なことを受け入れるのはとても大変です。主の御心を行なおうとする者にとって、言うことを聞かないというようなことはがっかりすることです。けれども、その背後で主が働いておられます。主が耳を塞ぐとか、口をきけなくするとか、否定的なことを敢えて行われるということを知れば、私たちは身軽になれるのです。私たちの責任ではないからです。主が命じられることのみを行えばよいのです。

## 2C アロンの代替 13-17

13 すると彼は言った。「ああ、わが主よ、どうかほかの人を遣わしてください。」

ついにしました。モーセの問題は、「できない」ではなく「したくない」なのです。けれども、これが、私たちが心の中でいつも葛藤していることです。主よ、とモーセが言っているように、自分自身は主を信じて生きて行きたい。まさか、キリスト者であることをやめることはしない。けれども、主からこれこれを行ないなさいと言われて、そこに遣わされることについては、ごめんだという立場です。主が人々を救う働きをされていて、一歩前に踏み出して人を用いて行われたいことがある。そして、そこに自分が実は導かれています。

14 すると、【主】の怒りがモーセに向かって燃え上がり、こう言われた。「あなたの兄、レビ人アロンがいるではないか。わたしは彼が雄弁であることをよく知っている。見よ、彼はあなたに会いに出て来ている。あなたに会えば、心から喜ぶだろう。15 彼に語り、彼の口にことばを置け。わたしはあなたの口とともにあり、また彼の口とともにあって、あなたがたがなすべきことを教える。16 彼があなたに代わって民に語る。彼があなたにとって口となり、あなたは彼にとって神の代わりとなる。17 また、あなたはこの杖を手に取り、これですしを行わなければならない。」

パウロは、「福音を宣べ伝えなければ、私はわざわざいます。(1コリ 9:16)」と言いました。主から命じられていること、召されていることは、それは自分がやりたくてやっていることではありません。自分が何かをやりたくて行っているのであれば、それは自分が選んでいるのであり、神が選んでいるわけではありません。しかし、召しというのは神が選ばれるのであって、それはせざるを得ないという類のものです。ここに、主が怒られている理由があります。神が、モーセを選び、モーセを召しておられます。ならば、モーセは人を恐れることよりも、神を恐れなければいけません。私たちも同じです、私たちの中心に主に対してどうなのか？という関心事があり、それから人々に対して接していくのです。

主は、モーセに代替案を与えられました。それが実にややこしいです。モーセとアロンがファラオの前に出ます。ところがモーセは直接ファラオに話すのではなく、アロンに言ってもらいます。それをアロンが雄弁にファラオに話すというものです。モーセが神さま訳で、アロンが預言者役です。本来、そんな面倒なことをしないほうがよいのですが。実は後に、災いが何度か下った後、その極みに達した時は、モーセが直接ファラオに語る場面が出てきます。要は、無用な作業なのです。このように、私たちは主の命令にそのまま従わないで、無駄なことを付け加えてしまうことによって、かえって後で枷となってしまうことが起こります。

そして、「あなたはこの杖を手に取り、これですしを行わなければならない。」と主は命じられますが、そうです、ここでの何の変哲もない杖が、神の杖と呼ばれるようになります。これをもって、後に紅海を分けることにもなります。

## 2A 召しに応えるモーセ 18-31

### 1B ミディアンからの出発 18-26

### 1C イテロからの許可 18-23

18 そこでモーセは行って、しゅうとイテロのもとに帰り、彼に言った。「どうか私をエジプトにいる同胞のもとに帰らせ、彼らがまだ生きながらえているかどうか、見させてください。」イテロはモーセに言った。「安心して行きなさい。」

モーセが主の召しに応えるのに、いろいろしなければいけないことがあります。その一つが、家

族への挨拶です。家族に対して、主にあつて自分が主の入用に関わらないといけないことを説明しないといけません。絶えず私たちは、そのことの連続ではないでしょうか？神を知らない家族に、イエス様に言われたからこれこれのことをすると説明するのは、至難の業です。だって、信仰を持っている人でさえ、その召しについて普通で考えたら反発してしまうことなのに、ましてや未信者の家族には理解をはるかに超えています。

モーセはここで、「どうか私をエジプトにいる同胞のもとに帰らせ、彼らがまだ生きながらえているかどうか、見させてください。」というに留めています。それ以上のこと、エジプトからイスラエル人を救い出すなんていうことは、到底、理解できなかったでしょう。けれども後に、イテロが戻って来たモーセに会って、エジプトで行われた偉業について聞き、イスラエルにはまことの神がいることにイテロ自身が気づきます。

19【主】はミディアンでモーセに言われた。「さあ、エジプトに帰れ。あなたのいのちを取ろうとしていた者は、みな死んだ。」

モーセのもう一つの不安を、神が解消させてくださっています。モーセはずっと、人への恐れと戦っている感じですね。モーセの命を狙っていたファラオは死にました。またファラオから命令を受けていた人々もいたのでしょう、彼らも死にました。イエス様の時も同じでしたね、ヘロデ王が死んだので、避難地のエジプトからユダヤに戻ろうとしました。けれども、アケラオというヘロデの息子もまた暴君だったので、ガリラヤのナザレに戻りました。主は、このように国の指導者という、大きな権力を与えられた存在にも、私たちのために働きかけてくださいます。国の帰還にも働きかけてくださるのです。

20 そこでモーセは妻や息子たちを連れ、彼らをろばに乗せて、エジプトの地へ帰って行った。モーセは神の杖を手を取った。

モーセは、家族を連れて行きます。先には姑でしたが、ここでは自分の妻と息子たちです。ゲルシヨムという息子は既に紹介されましたが、その他にエリエゼルという子が生まれていました(19:4)。けれども、結局、妻も息子たちもエジプトには行けなくなります。それは後で経緯が書いてあります。

21【主】はモーセに言われた。「あなたがエジプトに帰ったら、わたしがあなたの手に授けたすべての不思議を心に留め、それをファラオの前で行え。しかし、わたしが彼の心を頑なにするので、彼は民を去らせない。」

主は再びモーセにしなければいけないことを、命じられます。先ほど見せた不思議がありました。



人知を超えたところにあるかの業がありました。それで自信を付けて、今度はそれをファラオに対して見せるのだ、と命じておられます。けれども、強い注意事項があります。「わたしが彼の心を頑なにする」ということです。これは、パロが心を開きたいのに頑なにするというではありません。パロの心があまりにも強情であり、頑ななので、それを最大限にまで主が用いられ、それでご自分の栄光を現す、ということです。

主は、ご自分の反対する者たちをも用いて、ご自分の御業を行われる方です。福音が大きく広がる時、そこに活躍しているのは迫害者であります。初代教会が迫害によって広がったことは、よくご存じだと思います。その頑なさを用いて、実にユダヤ人の妬みを用いて、異邦人への宣教が広がりました。現代の世界宣教も、例えばイランは、イスラム革命が起こってからキリスト者が急増したと言われています。中国でも、無神論の共産党が出てきて、文化大革命による大迫害を経たから、その後でリバイバルが起こったと言われています。ですから、そうやって反対している者たちをも、主は実は操り人形のようにして用いられるのだということです。

22 そのとき、あなたはファラオに言わなければならない。【主】はこう言われる。『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。23 わたしはあなたに言う。わたしの子を去らせて、彼らがわたしに仕えるようにせよ。もし去らせるのを拒むなら、見よ、わたしはあなたの子、あなたの長子を殺す。』

「初子」というのは、家畜にしろ人にしろ、初めに生まれた男の子のことです。動物なら初めの雄です。もっとも大切な存在、相続者としての第一の存在です。主はイスラエルをそのような存在だと言われました。異邦人でもキリストに結ばれた者であれば、神の子としての身分が与えられています。そしてキリストご自身が、私たちの長子と呼ばれるようになります。そして、イスラエルを行かせないことによって、神はエジプトの初子を殺されます。つまり、自分のしたことの対価を支払うこととなります。最後の十番目の災いでそのことを行われます。

#### 2C ツィポラの怒り 24-26

24 さて、途中、一夜を明かす場所でのことだった。【主】はモーセに会い、彼を殺そうとされた。25 そのとき、ツィポラは火打石を取って、自分の息子の包皮を切り取り、モーセの両足に付けて言った。「まことに、あなたは私には血の花婿です。」26 すると、主はモーセを放された。彼女はそのとき、割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのである。

なんと、主がエジプトの初子を殺される前に、なんとモーセ自身を殺そうとされています。なんでそんなことを起こったのでしょうか？モーセの息子が割礼を受けていなかったためです。アブラハムに神が命じられた、子孫への契約の印として割礼を受けなければならないというものですが、それを母ツィポラはよしとしていなかったようです。「血の花婿」と言っているところに、彼女が血を流し

て自分の息子の包皮の一部を切り裂くことに強い抵抗を覚えていたのだと思います。

けれども、モーセは神の民と一つになるためにエジプトに戻ります。チツポラもそれに従わなければいけません。ところが彼女はそれができませんでした。18 章で、モーセとイスラエルの民がホレブの山の近くまで来た時に、舅のイテロが迎えに来ましたが、妻と息子たちもそこにいます。つまり、この時点でチツポラと息子たちは故郷に戻ったのです。ここに、契約を結んでいる者とそうでない者が一つの道を進むことができないことをよく表しています。御霊によって新しく生まれた者と、そうではない者が、ともに神の国に入ることはできません。たとえ同じ活動をしていても、そうなのです。ここも、私たちが主に従う時に、大きな決断となります。家族の絆でさえ、大きな葛藤を生じさせるものであります。

## 2B イスラエルの応答 27-31

27 さて、【主】はアロンに言われた。「荒野に行って、モーセに会え。」彼は行って、神の山でモーセに会い、口づけした。28 モーセは、自分を遣わすときに【主】が語られたことばのすべてと、彼に命じられたしるしのすべてを、アロンに告げた。

久しぶりに彼らは会うことができました。アロンほうが主に語られて、ホレブの神の山にまで来てくれました。ホレブの山はすでに「神の山」と呼ばれています。神が柴の火の中で会ってくださったところです。その時からのことを、じっくりと話したことでしょう。私たちも、主が力強く働かれたところに行って、そこで主のなされた業を話して見たら、信仰の継承ができるかもしれません。ちなみにアロンはモーセより三歳年上の兄で、当時で 83 歳になっていました。

29 それからモーセとアロンは行って、イスラエルの子らの長老たちをみな集めた。30 アロンは、【主】がモーセに語られたことばをみな語り、民の目の前でしるしを行った。31 民は信じた。彼らは、【主】がイスラエルの子らを顧み、その苦しみをご覧になったことを聞き、ひざまずいて礼拝した。

イスラエル人は、慰められました。自分たちが見捨てられていなかったことを実感しました。主が自分たちの苦しみをご覧になっていたことを知りました。そしてモーセもアロンも、主が共におられることを知ったことでしょう。ぜひ、皆さんも希望を捨てないでください。今、見えなくても、神はしっかりと今の試練をご覧になっておられます。

次に、ファラオのところに行きますが、初めからモーセは困難の中に入っていきます。